ここが「聞きたい」

県内のボーイスカウト活動

人間力を鍛えて成長

田村　広美さん(60)＝日本ボーイスカウト県連盟理事長

自然体験や奉仕活動を通じて子どもの心と体を育てるボーイスカウト。県内では現在、6団体が活動している。本年度から日本ボーイスカウト県連盟理事長となった田村広美さんに、現状や活動の意義を聞いた。

―ボーイスカウトとはどのような取り組みか。

「ボーイスカウトは『よりよい世界をつくる』を目標に掲げる世界的な教育運動で、1907年に英国で始まった。現在は世界中で4千万人以上が活動する。キャンプや山登りといった野外活動のほか、年代ごとのワークショップ、海外団員との交流、災害支援などのボランティアに取り組んでいる。子どもたちがグループで活動することで、リーダーシップや協調性を養っている」

―県内の現状は。

「団員は約200人。98年の約千人をピークに減っている。少子化に加えて習い事などが多様化し、その中で選ばれる機会が少なくなったのだろう。ボーイスカウトに入っていても、中学生になると部活動が忙しく辞めてしまうケースもある」

―団員確保に向けた考えは。

「人数を増やすことが活動の目的ではないが、ボーイスカウトに参加することで救われる子どもがいると思っている。勉強や運動が苦手でも、まきを割るのがうまい、ロープワークが得意といった部分で成功体験を重ねることができる。それぞれの子にスポットライトが当たるチャンスがある。ボーイスカウトの存在をもっと知ってもらうため、近年は外部イベントに積極的に参加している。親子向け防災教室も実施し好評だ。知名度を高める取り組みに引き続き力を入れたい」

―新型コロナウイルス感染拡大で社会は大きく変化している。

「今は社会がギスギスしており、互いの人間性を問われる場面が増えている。こうした時だからこそ、人間力を鍛えるボーイスカウトの意義は大きい。子どもたちは活動の中で互いに協力し、リーダーシップを発揮しながら成長していく。自己肯定感を持ち、信じられる仲間を得ることは、今の子どもたちにとって非常に大切だ」

―理事長としての抱負は。

「自分はボーイスカウト経験がない。長男が小学生の時に入団したため、保護者として関わり始めた。経験がないので、逆に客観的な目線で見ることができると思う。ボーイスカウトはなんだかよく分からない、という人も多いので魅力を広めたい。関わるスタッフは全員がボランティア。自分の時間を使い、熱心に子どもたちのために働いてくれている。熱意を持ち続けてもらえるようサポートしていく」

（聞き手＝三浦ちひろ）

たむら・ひろみ　60年6月、青森県生まれ。秋田大大学院医学系研究科修了。日本ボーイスカウト県連盟理事などを経て4月から現職。たむら船越クリニック院長。秋田市住。